

学習者作文の評価における観点の多様性

—一般日本語母語話者の場合—

宇佐美 洋

1. はじめに

近年、日本国内における日本語非母語話者の増加に伴って、社会の中で「日本語を母語としない人々を書く日本語」が流通する機会も着実に増加している。当然のことながらこうした日本語の文章は、日本語母語話者の書く文章とはさまざまな意味で異なっている。つまり日本語の中に、新たな、かつ多様な言語変種が発生しつつあるとあってよい。

学習者の立場からすれば、日本語として正確であるだけでなく、日本の社会言語習慣にも適った「自然な日本語」を書くのはきわめて困難なことである。また学習者の中には、不十分な学習環境におかれ、不十分な学習手段しか利用できない人々もいるだろうし、そもそもある特定の、限定された場面においてのみ日本語が使用できればそれでよい、という学習者も少なくない。このような学習者に対し、母語話者と同じような日本語書記能力を求めるのは現実的な話ではない。

しかしながら、学習者の言語変種を無制限に認めてよい、ということには当然ならない。日本の大学、あるいは企業といった、日本語を使った高度な活動を求められる言語社会で生きていこうとする学習者には、その言語社会に特有の言語変種を使いこなせるよう十分な訓練を受ける必要がある。また、日本語を用いて高度な活動をおこなう必要のない学習者であっても、読み手の多くに意図が伝わらないような言語表現、あるいは読み手の多くに違和感・不快感を与えてしまうような言語表現を多用しては、それは結局学習者自身の損失になる。「外国人だからこの程度でいい」という意識は、日本語・日本人をより深く理解したいと考えている学習者にとってはかえって無礼でもあろう。ある言語表現が、コミュニケーション上深刻な問題を引き起こす可能性があるのであれば、そのことは率直に学習者側に伝えていったほうが、母語話者と学習者間の信頼関係を築いていく上でより有意義であるといえよう。

問題なのは、学習者言語変種の多様性をどのあたりまでは認め、どこから先は修正を求めるのがよいのか、という「線引き」の判断である。

Halliday の選択体系機能言語学においては、言語が使用される文脈は、1) やりとりされる話題、2) やりとりをする者同士の関係性、3) 話しことばか書きことばかという伝達方式、という 3 つの変数によって特徴づけられる(Halliday 1994)。このことを逆にいうならば、この 3 つの変数によって、どのような言語変種が適切であるか、ということが規定されていくことになる。この 3 つの変数を考慮に入れることで、許容しうる言語変種をある程度までは絞り込んでいくことは可能であろう。

しかしながらこの 3 つの変数は、「その文脈にふさわしい言語変種の典型例」を浮かび上がらせるのに有用であるにしても、「線引き」をおこなうための決め手にはならない。ある

特定の文脈において、そこで期待される言語変種の典型例からどのくらい離れたときに違和感を持つか、許容できないと思うか、またどの程度の逸脱表現について意味理解が不可能となるかは、同じ日本語母語話者であってもかなりの個人差が予想されるからである。

また、ある言語変種が許容できるかできないかは、典型例からの単純な距離によって決められるというものでもない。ある人は表記の誤りについて鋭敏に反応し、またある人は文体の統一ということについてこだわりを示す、というように、人によって「特に着目するポイント」は異なっている。このため、ある人にとってはまったく許容しがたいと思われる言語変種が、また別の人にとっては逆に高く評価される、ということも十分に起こりうるのである。

このように考えると、ある言語変種が現実の言語使用の場において許容されるかされないかを定める要因としては、その場の「文脈」を特徴づける 1) 話題、2) 関係性、3) 伝達方式、という Halliday の 3 つの変数のほかに、

4) 受け手独自の言語評価観、

という第 4 の変数が関係していることが分かるだろう。

ここでいう「評価観」とは、評価をおこなう際、言語使用のさまざまな側面のなかで「どれを重視しどれを重視しないか」という取捨選択、または重み付けをおこなうための価値観のことを指している。こうした「評価観」なるものは、他の 3 つの変数に比べてもさらにとらえにくく、予測しがたいものである。こうした事柄は分析の対象とはせず、一種の誤差として扱っていく、というやり方も考えられる。

しかしながら個人の「評価観」のばらつきは、誤差の範囲として扱ってしまうにはあまりにもばらつきが大きすぎ、それを無視してしまうことは現実問題として難しいように思われる。むしろ筆者は、言語パフォーマンスに対する「評価」というものがいかにばらつきうるものか、そのばらつきの背後にはいかに多様な「評価観のばらつき」が存在するのか、個人の「評価観」というものはいったいどのような要素によって構成されているのか、そうした構成要素はどのように分類整理できるのか、ということ積極的に考察の対象としたいと考える。

現代の日本社会において、どういう言語変種が実際に許容され、許容されないでいるのか、また評価がばらつく言語変種があるとしたらそれはどういうもので、その背後にはどのような要因があるか、という実態を把握することは、ほかでもなく「学習者の日本語」が現代日本社会においてどのように受容されているのかという社会言語学的情報となる。その情報は、学習者本人にとっても、また指導計画を立てる教師にとっても、学習・指導のプランニングをおこなう際極めて重要なものとなり得よう。

また評価観の構成要素を分類整理することは、評価に携わる者が、自分自身どういう評価観を持っているかを振り返るための極めて重要な情報になるものと考えられる。

教育の場における「評価」とは、当然のことながら教育目標によってその判断基準も変わっていくものである。熟達した評価者であれば、特定の教育の場において何が目標とされているのかを正確に把握し、その目標にあわせて評価基準を調整することが可能であろう。しかし、評価という行為に熟達していない人々にとって、目標にあわせて評価基準を調整するということは決して易しいことではなく、自らがあらかじめ持っている「デフォルトの評価観」とでも呼ぶべきものからなかなか抜けさせないことも少なくないものと思われる。

そのようなとき、評価者本人が、自分自身はどのような「評価観構成要素」を重視しているのか、ということを知覚でき、それが、ある特定の評価の場において求められている評価基準とどのようにずれているのか分析的に提示できれば、自らの評価基準を調整するうえでかなり有用であるものと考えられる。つまり、評価者の研修において有効な情報となりうる、ということである。

本論では、現代日本社会における「評価観」調査のための第一歩として、まずは学習者が日本語で書いた作文をとりあげ、それを同一条件においてできるだけ多くの人々に評価してもらったとき、

- 1) その評価結果にどの程度のばらつきが生じるか、
- 2) そのばらつきの背後に、どのような「評価観点の多様性」が存在しているか

を示し、今後「評価観」に関する研究を進めていくための指針としたい。

2. 先行研究

一般日本語母語話者が、学習者作文に対しどのような基準で評価をおこなうかに関する先行研究としては、まず田中他(1998)と、それに続く田中他(1999)が挙げられる。

田中他(1998)においては、日本人教師集団(T)と一般日本人集団(G)とに学習者作文 6 編の順位付けをしてもらい、その評価観点を因子分析したところ、「正確さ」「構成・形式」「内容」「豊かさ」という 4 因子が得られた。また T は評価において「構成・形式」を重視し、全体的に G より多様な観点を使用していることが分かったという。

また田中他(1999)では、田中他(1998)で用いた作文のうちほぼ同レベルと判定される 2 つの作文を選び、T、G それぞれにどちらがよいかを選んでもらった後、評価項目別の 5 段階評価をおこなった。その結果、評価の際「正確さ」を重視するグループと、高度な文型・語彙の使用を重視するグループがあることが示唆された。「内容」「趣旨の明確さ」「構成」については、上記双方のグループにおいて重要な項目となっている可能性があるが、ただしこれらの項目については共通の基準では評価されていないことが分かったという。

田中らの研究は主として量的調査に基づくものであり、集団としての評価傾向を描き出すとするものであった。その一方で、「評価をする際、どのような点にどう着目したか」

「着目した点が実際に評価に結びついたのか」など、評価の具体的な内容については量的調査では十分にとらえることはできない。

そこで佐々木(2004)では、日本語母語話者 20 名に学習者の作文 2 編を読んでもらい、自由に印象を言ってもらい、という質的調査によって、評価の具体的な内容を把握しようと試みている。コメントの分析の結果、従来あまり意識されてこなかった評価の観点として、「読み手意識」というものが指摘された。つまり、書き手が読み手のことを十分意識して文章を書いているか、という点が、一般母語話者が学習者作文を読むときの重要な評価観点となっているのではないかと、ということである。

「読み手意識」という観点は興味深いものであるが、しかしながら質的調査に伴う制約として、あまり多くの種類のデータを収集することが難しい、ということが挙げられる。佐々木(2004)においては、2 編の学習者作文に対するコメントの分析から評価の具体的な内容をあぶりだそうとしているが、もっと多様な学習者作文について調査をおこなえば、さらに多様な評価の観点が得られるということは容易に予想できる。

そこで今回筆者は、量的調査と質的調査の長所をうまく組み合わせるような形で、一般日本語母語話者の評価観に関する調査を遂行することを計画した。

3. 調査

調査は、第 1 次調査と第 2 次調査に分けておこなわれた。第 1 次調査は量的調査、第 2 次調査は、量的調査と質的調査とを組み合わせた調査であった。

3.1 第 1 次調査 (2006 年 2 月実施)

3.1.1 調査の概要

3.1.1.1 目的

大量の学習者作文を多数の評価者に読んでもらい、評点をつけるよう依頼する。その評点を集計することによって、評価がばらつきやすい作文を抽出する。

3.1.1.2 評価対象とした学習者作文

国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース¹⁾」(以下「作文対訳 DB」と略称)に収録された日本語作文から、計 113 編を抽出した。出身国ごとの執筆者内訳は、ベルギー 5、ブラジル 6、中国 15、ドイツ 1、フィンランド 5、フランス 6、ハンガリー 1、インドネシア 5、インド 7、日本 1、カンボジア 8、韓国 13、マレーシア 17、モンゴル 2、ポーランド 1、シンガポール 6、スロベニア 1、タイ 8、米国 2、ベトナム 3。出身国ごとの執筆者数のばらつきは、「作文対訳 DB」におけるデータ数のばらつきをおおむね反映している。また 1 編あたりの作文の分量は 300~800 字程度である。

評価者に作文を読んでもらうときは、作文のテキストデータをワープロソフトに貼り付

¹ <http://srasvadi.kokken.go.jp/taiyakuDB/>

け、読みやすく、また書き込みがしやすいように文字を拡大した上で印刷したものを用いた。

3.1.1.3 評定者

東京都内の人材派遣会社に依頼し、計 32 名²の日本語母語話者を派遣してもらった。派遣の条件は、「大学学部卒業以上の学歴を持つ日本語母語話者」とした。結果として、評定者共通の属性としては、「首都圏に住み、日常的に日本語を使用して社会的生活を営んでいる」ということが挙げられる。

年齢は 24 歳から 59 歳、男性 16 名、女性 16 名であった。日本語を母語としない人に対する日本語教授経験のある人はいなかった。

3.1.1.4 評定手順

評定は、2 回に分けておこなわれた。

評定者に作文を綴じたもの（おおむね 20 編が一束となっている）を渡し、まず 1 回目は、文章中に「日本語として不自然なところ」がないか、という観点から読んでもらった。おかしいと思ったところには下線を引いてもらい、そのおかしさの重篤度を 1～3 の 3 段階³で評定してもらった。

「不自然さ」についての下線引きと評定がすべて終わったところで、先ほどと同じ作文の束（下線の引かれていない、新しいコピー）を渡し、今度は「意味の分からないところ」がないか、という観点から同じ作文を読み直してもらった。意味が分からないところには下線を引いてもらい、その分からなさの重篤度を 1～3 の 3 段階⁴で評定してもらい、下線の脇にその数字を記入してもらうこととした。

1 編の作文について「分からなさ」についての下線引きと評定が終わったところで、その作文についての全体的なコメントを書いてもらうとともに、5 段階での「評点⁵」をつけてもらった。評点は、「不自然さ」、「分からなさ」という 2 つの観点についてつけてもらったうえで、特定の観点を指定せず全体的な印象を問う「総合評価」についてもつけてもらった。

文章を読む速さにはかなりの個人差があり、また派遣会社とは時間単位での契約をおこなったため、ひとりの評定者に一定数の作文評定を依頼する、という形ではなく、契約時間内に読める限りの作文について評定を依頼することとした。さらに、ひとりの評定者が

² 派遣会社には「1 日 10 名、6 日間、のべ 60 名」の人材派遣を依頼した。ただし 3 日分までの重複派遣を認めため、結果として異なり人数は 32 名となった。
³ 各段階については以下のように説明した。3：非常におかしく、必ず修正すべきである、2：3 と 1 の中間程度、1：間違っているとはいえないが、ややおかしい。
⁴ 各段階については以下のように説明した。3：意味がまったく分からない、2：意味がなんとなく分かるが、確実には分からない、1：分かりにくい、「おそらくこういう意味だろう」という推測はできる。
⁵ 評定時には、A B C D E の中からひとつに○をつけてもらうというやり方をとった。集計時には A を 4 点、E を 0 点として計算した。

複数の日にわたって重複して派遣されることも認められたため、評定者ひとりあたりの評定数にはかなりのばらつきがある（最少 12 編，最多 75 編）。しかしひとつの作文については、おおむね 10 名前後の異なる評定者が読み、評定をおこなうよう調整した。

1 日あたりの拘束時間は 4 時間半であったが、最初の 30 分を作業手順の説明にあて、実際に作業の練習もおこなった。また、作業途中に適宜休憩も入れたため、実際の作業時間は 1 日あたり 4 時間弱であった。

3.1.1.5 評定のばらつきが大きかった作文の抽出

本論での分析ではこれらのデータのうち、「不自然さ評価」「分からなさ評価」、および「総合評価」の評点データと、各作文に対するコメントデータを使用する⁶。

まず、評定対象となった全 113 の作文に対し、異なる 10 名前後の評定者がそれぞれ与えた「不自然さ評価」「分からなさ評価」「総合評価」の評点を表計算ソフトウェアに入力し、作文ごとに平均値と標準偏差を算出した。評価の標準偏差の大きいものから並べ替えることによって、「評価のばらつきが大きい作文」が得られることになる。

「不自然さ評価」「分からなさ評価」「総合評価」それぞれについて、評点の標準偏差が大きかった作文上位 10 位（ただし標準偏差が同じ値で並ぶ場合は 11 以上の作文を抽出した）に関する情報を、以下の表 1-3 に示す。この表の中で、“N”は「不自然さ」に関する評点，“C”は「分かりにくいさ」に関する評点，そして“T”は総合評点を示している。“sd”は評点の標準偏差，“順位”は、その作文に対する評点平均値が全 113 編の作文中何位であったかを示している。

表 1 N のばらつき上位 10 作文

作文ID	評定者数	N平均	N順位	N sd
hu005	9	2.22	50	1.39
cn025	10	2.50	35	1.35
fi010	10	2.20	51	1.32
fr087	11	1.73	77	1.27
cn034	10	2.40	39	1.26
be005	10	2.30	46	1.25
kh010	10	1.20	103	1.23
kh050	9	2.00	60	1.22
sg075	10	1.90	65	1.20
cn015	10	1.50	86	1.18

表 2 C のばらつき上位 10 作文

作文ID	評定者数	C平均	C順位	C sd
th013	10	2.10	73	1.52
cn004	9	3.00	29	1.50
kr174	10	2.40	57	1.35
hu005	9	2.33	63	1.32
cn034	10	2.60	47	1.26
be030	10	2.40	57	1.26
cn044	11	2.64	45	1.21
kh065	10	2.10	73	1.20
cn035	10	2.40	57	1.17
mn007	10	2.30	66	1.16
fi025	10	1.30	102	1.16

⁶ それ以外のデータは、それぞれの作文に対する補足データとして「作文対訳データベース」に追加される。

表3 Tのばらつき上位10作文

作文ID	評定者数	T平均	T順位	T sd
th013	10	2.00	67	1.49
hu005	9	2.00	67	1.41
cn004	9	2.67	31	1.22
kr190	10	2.60	33	1.17
th070	8	2.25	56	1.16
in002	10	2.30	51	1.16
th090	10	2.90	21	1.10
kr130	10	2.90	21	1.10
kr110	10	3.10	13	1.10
kh065	10	1.90	72	1.10
in040	10	2.10	63	1.10

3.1.2 分析

ここで、前節で抽出された「評価のばらつきの大きかった作文」をいくつか取り上げ、そのばらつきの背後にどのような要因があったかを、作文に対するコメントを分析することで探してみたい。

3.1.2.1 th013

総合評価でもっともばらつきが大きかった th013 という作文の例を挙げる。この作文は「分からなさ評価」でもっとも大きいばらつきを示している。一方「不自然さ評価」のばらつきの大きさは1.06（27位）であり、極端に大きなばらつきを示したわけではなかった。

<p>th013</p> <p style="text-align: center;">プーモンコン式</p> <p>毎年、五月十四日にサナムルウンでプーモンコン式があります。この式は農民に気力をあげるために行われます。それに気候と農作物について予言しますから、農民のために一番大切な式です。</p> <p>この式は国王は議長になります。それに、たくさんの方はそこに行きます。まず、サナムルウンの地は田になる準備をします。パラモンという修道士とパヤーレクナーがいます。パラモンはパラモン教の式を行います。しかし、パヤーレクナーは二頭の牛で田を耕します。あとで二人の女性は銀と金のかごに入るいろいろな糶をまいます。ぜんぶで三回耕します。田を耕しおわると、二頭の牛はたべものを食べてあげます。そのたべものは十種類があります。たとえば、米や水やお酒や豆などです。どの食べ物は予言が違いますから、皆は牛がなにを食べるか知りたがります。たとえば、お酒を飲むのは今年たくさん水があります。また、農業がたいへんいいです。それで、農民が気力がある感じます。どの年は予言があまりよくないなら、農民はかばらなければなりません。しかし、ほとんどの予言はいいです。</p> <p>プーモンコンの式のあとで、皆さんは田の中で糶を集まるために走り込みます。糶を</p>

あがめます。それとも靱をうえます。

タイは農業国ですから、この式はたいへんたいせつです。それに昔から伝統であります。

評点でもばらつきが大きかったが、評定者のコメントでも、「分かりにくい」ことを指摘するものと、逆に「分かりやすい」ことを指摘するものが混在していた。コメント例をいくつか挙げる。

<プラス面を指摘するもの>

- ・説明内容は理解できる(0602⁷)
- ・「走り込みます」以外はとても分かりやすい(0621)

<マイナス面を指摘するもの>

- ・タイの言葉が多く、その説明もないので、理解しにくい。一文一文の文章が、短く「～ます。」「～ます。」とこま切れで、わかりにくい。(0618)
- ・主語が何かははっきりしないので、状況を把握しにくい箇所が何箇所もありました(0619)
- ・一行一行の文章が中途になって意味が相手に伝わりにくい。(0622)
- ・なじみのない言葉が多いのと同時に、接続詞などがおかしい文が多いので、内容を確実に特定することができず、何度も読み返してしまった。(0625)

<プラス面、マイナス面の両方を指摘するもの>

- ・言っている意味は分かるが、書き手が、文法など(ママ)正しい文の組み立て方をこんらんしているような感じをうける。(0607)

これらのコメント内容を勘案すると、この作文の問題点は以下のように集約できよう。

1) 結束性が十分に保証されていない。

「一文一文の文章が、短く「～ます。」「～ます。」とこま切れ」(0618)、「一行一行の文章が中途になって」(0622)、「接続詞などがおかしい」(0625)などのコメントはおそらく、個々の文と前後の文との関係性が適切に表現されていないことに対するものと考えられる。もともと、接続詞、指示詞等、結束性(cohesion)を表現するための語彙的手段は使用されてはいるのだが、その使い方が必ずしも適切でないため、結果として文同士の関係が分かりにくくなってしまっている。

⁷ 4桁の数字は評定者につけられたID番号。06で始まるものは06年の第1次調査、07で始まるものは07年の第2次調査での評定者である。

2) 一般的日本語母語話者にとってなじみのない語が説明なしで使用されている。

「タイの言葉が多く」(0618), 「なじみのない言葉が多い」(0625)などのコメントがまさにこの点を指摘している。具体的には「プーモンコン式」「サナムルウン」などを指すものである。

また、コメントに明示的にはあらわれていないが、以下のような問題点も指摘できる。

3) 儀式の核心部分の説明に、まったく意味不明の文が混じっている。

「どの食べ物は予言が違いますから、皆は牛がなにを食べるか知りたがります」という1文のことである。この文は、その年の農作物の出来を占うというこの儀式の中でも、もっとも大切な部分を説明するものと考えられるが、この文1文だけを取り出して読んだのでは、おそらく意味を推測することはほとんど不可能であると考えられる。

しかしながら、上記のような問題点はもちながら、これらは読み手としてまったく対応不可能な問題点、というわけではない。文同士の関係は明確には表現されていなくても、またタイ語の単語がいきなり使用されていても、読み手が適宜推測を働かせることによって、儀式の概要をなんとなく了解することは不可能ではない。非常にシンプルな構文のみが使用されていることも理解の手助けになるだろう。

「どの食べ物は予言が違いますから」は、確かにこの1文だけを取り出すとまったく理解不可能であるかもしれないが、その次に「たとえば、お酒を飲むのは今年たくさんの水があります」という、実例を挙げる文がでているので、「牛が酒を飲んだらその年は水には困らない、米を食べたら米がよくとれる、というように、牛がどの食べ物を食べるかによって農作物の収穫予言をおこなうことではないか」と推測することは不可能ではない。

要するにこの作文は、読み手に多くの推測を求める文章なのである。読み手によっては、あまり苦もなく推測を働かせることのできる人もいるだろうし、そうでない人もいる。また、仮に推測を働かせることはできたとしても、「読み手にこれだけの推測を強いる作文は、よい作文とはいえない」と考えることもあるだろう。この作文に対する評価のばらつきは、おそらくその点にかかっているものと考えられる。

3.1.2.2 hu005

次に挙げる hu005 という作文は、総合評価でのばらつきが2位であったが、分からなさ評価、不自然さ評価それぞれにおいて評価のばらつきが大きいものであった。

hu005

私の意見ではこの問題*にめぐっていろいろな意見がぶ*つかる。当人の専*門とも深いかわりをもっている。お医者さんか研究者などで、母国語が英語ではなければ、さいていでも英語を専*問レベルで通じるほどマスターしなければならない。その専問の新しい情報の80%ぐらいは共通語に選ばれた英語で出版されるそう。逆に別の仕事をしてい

る人なら、例えば観光客かほかの外国*人とよく接触する人ならーガイド、などー2 つないし3つの世界共通言*語を話*せた方がやくにたつと思います。この場*合、中級レベルーかるく話*せて、新聞やニュースの大体の内容をわかれば充分だと思います。私達、専*門で日本語を習う人にはやっぱりできるかぎり上級レベルまで頑張った方がいい。(かな*りラッキーですよ！ 日本語な*ら 5 万字以上の漢*字が存在するので死ぬまでにも「ああ、完璧だ」と言えな*いから
けっきょく、この外国語に関する課題は本人 次第だとかんがえた方がいい。

注：文中の*は、手書き原稿において、その直前の文字が字形を誤って書かれていたことを示すもの。以下同様

この作文についても、「分かりやすい」ことを指摘するコメントと「分かりにくい」ことを指摘するコメントの両方が混在していた。

<プラス面を指摘するもの>

- ・文の構成がわかりやすい(5028)
- ・全体的に、とても文章は上手だと思います。言葉の現状の説明や、自分の考えを述べるのもうまくできているから、説得力のある文章になっていると思います。(5032)

<マイナス面を指摘するもの>

- ・最初の部分が分かりにくいです。(唐突に話が始まるので)最後まで読んで、やっと全体像がつかめました。(5019)
- ・最初、「この問題」と書いてしまっていて、何の問題か書いてないので、何を書いている文章なのか理解するのに時間がかかった。「専門(ママ)」と書かれているが、これは「分野」のまちがいでしょうか？そうすると、仕事で第二外国語が必要な人は第二外国語を上級レベルまでマスターする必要があるけど、他の人は必要ないという文章なのではしょうか？→やはりわかりません。(5026)
- ・ポイントからずれてしまい、書きたい内容がわかりません。(5029)
- ・全体的に言いたいことがわかりにくい。段落分けが不適切である。(5031)

<プラス面・マイナス面の両方を指摘するもの>

- ・冒頭の部分と最後の方の”～ラッキー”の下り(ママ)は、全く唐突に、何故そこにてでくるのか、又意味もわからなかった。それ以外は、わかりやすいと思います。(5025)

この作文の問題点としては、以下のような事柄を挙げることができる。

1) そもそもどういう話題について語ろうとしているのかが明記されていない。

実はこの作文は、「ひとつの外国語を深く学ぶのがよいか、不完全でもいいから複数の言語を学ぶのがよいか」という課題文に沿って書かれたものである。しかし、「唐突に話が始まる」(5019)、「最初、「この問題」と書いてしまっていて、何の問題か書いてない」(5026)というコメントで指摘されているように、これからどういう問題について語ろうとするのかを示していない(題名もない)ため、最後まで読まないと話の方向性がつかめない。

2) 文章中に意図不明の文が挿入されている。

「かなりラッキーですよ」という 1 文が唐突に挿入されており、どういう意図でこの文が書かれたのかが非常に想像しにくい。

3) 文章の構成は一応意識されているが、それが明示的でない。

文章構成に対し、「文の構成がわかりやすい」(5028)という肯定的コメントがある一方で、「段落分けが不適切である」(5031)と、まったく相反するコメントも挙げられている。これは、「文章構成は、書き手の頭の中では一応意識されているのであろうが、読み手にはそれが非常に分かりにくい」ということによるものであろう。

この文章は、

- A. 専門家は英語を深く学ばなければならない(深く学ぶべき)
- B. ガイドなどの仕事をする人は、中級レベルでよいので、複数の言語を話せるのがよい(深く学ばなくてよい)
- C. 自分たちは専門的に日本語を学ぶので、上級レベルまでがんばるべきだ(深く学ぶべき)
- D. (ひとつの外国語を深く専門的に学ぶべきなのか、多くの外国語を学ぶべきなのか) 結局本人次第

という構成で書かれていると考えることができる。つまり、外国語学習に関するさまざまな場合を想定し、それぞれの場合どの程度まで深く言語を学ぶべきかについて述べたあと、結局「学習者の置かれた状況次第」という結論で締めくくっているわけである。

しかしながら、「深く学ぶべき」という考え方(A,C)と「あまり深く学ばなくてよい」という考え方(B)とが交互に現われるという構成になっているため、常に直前に書いたこととは逆のことを述べていくことになっている。またA, B, Cの間に改行がないため、そもそも上記のように分割できるということさえ分かりにくいし、なおかつAは英語について、Cは日本語について言及しており、その切り替えが不分明であるため、結果として全体として何を言いたいのかが極めて分かりにくくなってしまっているのである。ただ、書き手の意識の中では、おそらく上記のような構成が意識されているものと考えられるため、

たまたまその構成を素直に感じ取ることができた読み手にとっては「構成がわかりやすい」と感じられるものと思われる。

このように、hu005 という作文にはさまざまな問題点が内包されているが、その反面、

- ・ 1文1文としてみると極めて分かりやすく、表現も自然
- ・ 漢字などに微細な誤用は存在するが、コミュニケーション上支障となるようなものではない

という長所を指摘することもまた十分に可能である。特に、「表現が日本語として自然」という点についてみれば、調査に用いた 113 編の作文の中でも、疑いなくかなり上位に来るものと思われる。

それなのに、「不自然さ評定」、「分かりにくさ評定」「全体評定」いずれを採ってみてもばらつきが大きくなってしまったのはなぜか。それはひとえに、「1 文単位で見ると自然かつ分かりやすいが、文章全体で見ると不自然かつ分かりにくい」ということによるものと考えられる。このため、文章全体を 1 つのまとまりととらえる傾向のある評定者は比較的低い評点をつけ、文章を細部に分割し、それぞれの部分に誤りがないかどうか、という観点から評価をおこなう評定者は高い評点をつける、という結果になったものと解釈できる。

3.1.2.3 cn004

次に、総合評価でのばらつきが 3 位であった cn004 という作文を見てみよう。

cn004

たばこがいつごろから 人間に 愛されたのは 私はわかりませんが、たばこが今まで 生きているのも やっぱり 人間自身のせいだと 思います。

たばこ問題は ただ 日本だけの問題ではありません。けれども 解決できないとは私は 思っていません。

国として、いろいろな国も 同じだと思いますけど、たばこから 国が たくさんの税金を集めています。だから たばこが 国の重要な資金来源ですから これが たばこが 生きている主要な原因だと私は思っています。

次は、コマーシャルの作用です。私が思っているのは どうして 日本ではたばこのコマーシャルも テレビで放送できるんですか？私の出身国中国では たばこのコマーシャルは直接にテレビで放送することは できません。それは 法律で 禁止されてます。

たばこを吸うのは 生れたときから 持つてることでは ありませんので 吸い始まって も また それをやめることはできると私は思います。それが 人間という物が 持つて いる特徴から 分かると思います。人間は自分の意識を左右できますから たばこも やめれます。

だから、国として とくに、国民の健康を大事にする国としては 法律を 作成して また、それを 厳しく 執*行すれば たばこのもんだいは きっと 解決できると 思います。

この作文に対するコメントを以下に挙げる。

<プラス面を指摘するもの>

- ・スラスラ読める(5002)
- ・とてもわかりやすい文章。(5003)
- ・漢字の間違いも無く、文章全体的にととても分かりやすいです。簡単に構成されている点が良かったと思います。(5005)
- ・流れがスムーズ(5006)

<マイナス面を指摘するもの>

- ・ unnecessary 文字間のスペースはいらない(5012)
- ・言葉の使い方に問題あり。(5016)
- ・「たばこ問題」がどのような問題なのかを定義していない。読点とスペースが混在し、読みにくい。不自然。「国としてとくに、国民の健康を大事にする国としては」とあるがどの国を示しているのか不明。コマーシャルの作用が、たばこ問題とどう関係するかがわからない。(5017)

<プラス面・マイナス面の両方を指摘するもの>

- ・文章の主張はわかりやすい。しかし、表現の仕方というか言葉の使い方がまちがっておぼえているように思う。(5026)
- ・句点が少なくスペースが多いのは何か変な感じがします。主張内容ははっきりしているし、シンプルでわかりやすいです。ただたばこを吸うのと、人間という特徴とのつながりがあまりよくわかりませんでした。(5027)

全体的に肯定的なコメントが多かったように思われる。マイナス面のコメントとしては、「文字間の unnecessary スペース」を指摘したものが3件(5012, 5017, 5027)、「言葉の使い方」に不自然な点があることを指摘したものが2件(5016, 5026)あった。一方それ以外に、「コマーシャルの作用が、たばこ問題とどう関係するかがわからない」(5017)、「たばこを吸うのと、人間という特徴とのつながりがあまりよくわかりませんでした」(5027)というコメントもあった。これらは要するに、

文章を構成する各部分同士の論理的な関係が不分明である

ということを指摘するコメントであると見ることができよう。

この文章は、一見すらすらと読めるように見えながら、詳細に読み解いていくと、いったい何を主張したいのかが非常に分かりにくい文章であることが見えてくる。

おそらく最後の1文「法律を 作成してまた、それを 厳しく 執*行すれば たばこのもんだいは きっと 解決できると 思います」が書き手の主張であろうと思われる。しかし、具体的にどういう法律を作るべきなのかは明らかにされていない。文脈から想像すると、「たばこのコマーシャルを規制ないしは禁止する法律」かとも思われるが、コマーシャルを規制したところで、たばこに関するさまざまな問題が「きっと解決できる」とは思われにくい。かといって、コマーシャル規制よりもっと踏み込んで、たばこそのものを規制したり禁止したりする法律なのかと考えると、今度は「たばこが、国の重要な資金来源」である、という記載と矛盾する。そもそも、最後から2つ目の段落では「たばこは自分でやめられる」ということを述べているのに、最終段落では「たばこ問題解決のために法律を作成する」ことの必要性を述べており、ここにも矛盾、あるいは少なくとも重大な説明不足が感じられる。

また、文章全体の構成もあまり意識されていないように思われる。文章の前半では、「たばこが現在もなお生き延びている理由」について述べられているが、そのことが後半の、「たばこ問題を解決するためにはどうしたらいいか」という主張と直接には結びついていない。効果的な主張をおこなうために文章全体の構成を意識して書いた、というより、思いついたことを思いつくままに並べただけ、という印象を非常に強く受ける。つまり、「結束性 cohesion」はある程度保障されているものの、「一貫性 coherence」の面が不十分である、ということができよう。

文字間に不必要なスペースがあるということ、ことば遣いに不自然な点があるということは、作文を一見すればすぐに分かることである。しかしながら、文章を構成する各部分同士の論理的関係が不分明、ということは、文章を多少深く読み込まなければ気づきにくい問題点である。こうした「気づきにくい問題点」を備えている作文は、評価もばらつきがちになるものと考えることができる。

また評定者によっては、文章評価において、そもそも「内容・構成が妥当かどうか」ということが評価の基準として存在していない（あるいは優先順位が低い）、ということもありえよう。「気づきにくい問題点」に気づくか気づかないかは、評定者が「内容・構成の妥当性」という事柄に対し、敏感に反応するタイプなのかそうでないのか、ということにかかっていると見えるであろう。「内容・構成の妥当性」ということが評価基準としてない、あるいは優先順位が低い評定者は、そういう点に着目して文章を読むことをしないために、当然そういう点での問題点にも気づきにくい、ということである。

3.2 第2次調査 (2007年1月実施)

3.2.1 調査の概要

3.2.1.1 目的

第1次調査では基本的に量的な手順によって「評価のばらつく作文」を抽出した。それぞれの作文に対するコメントを分析したり、「不自然さ評価」「分からなさ評価」「総合評価」

という異なる観点からの評点を比較したりすることによって、それぞれの評定者が、どういう観点で学習者作文を読んでいるか、かなりの程度まで推測することは可能であるように思われる。しかしながらおそらく、コメントとして表にあらわれた内容は、評定者が作文を読んだときに考えたことのごく一部であると考えられる。

また、第1次調査で評価のばらつきの大きかった作文の中には、一見したところ非常に読みやすいのだが、よく読むと論理的一貫性がなかったり、細部の説明がまったくできていなかったりするものが含まれている。こういう作文に高い評点をつけた評定者は、上記のような問題点に気づきながらそれを許容したのか、あるいはそのような問題点をそもそも意識していなかったのか、ということとは分からない。このようなことも含めて明らかにするためには、評定後、評定者にインタビューをおこない、作文を読んだときにどのようなことを考えていたのかを確認する必要があると考えた。

さらに第1次調査では、ひとつの作文について10名前後の異なる評定者が評定をおこなっているが、それぞれの作文について10名の評定者の組み合わせは異なっており、厳密な意味では評点の比較はできない。

そこで第2次調査では、第1次調査で抽出された20編の作文に対し、同一の評定者集団が同一の条件の下で評定をおこなうよう依頼するとともに、評定後、ひとりひとりの評定者に対しインタビューをおこない、そこで得られたコメントも分析の対象に加えることとした。

3.2.1.2. 評価対象とした学習者作文

第1次調査の結果から、以下の手順により、「特にばらつきの大きい作文」を抽出した。

- 1) 3.1.1.5 節で抽出された32編の作文のうち、重複するものを除外し、27編の作文を残した。
- 2) 2)で残った作文についてその評点の具体的なばらつき具合を検討し、「少数の評定者が他から極端に外れた評点をつけている作文」を除外した。またそれぞれの作文について、評点のばらつきが大きくなった理由⁸について検討し、同じような理由によってばらつきが生じたと考えられる作文グループの中からは、1編のみを残し他を除外した。

こうして抽出された作文は20編となった。出身国ごとの執筆者内訳は、ベルギー1、中国5、フィンランド1、フランス1、ハンガリー1、インド1、カンボジア3、韓国2、マレーシア1、モンゴル1、ポーランド1、シンガポール1、タイ1となった。抽出された作文に関する情報を表4として示す（この表では、Tのばらつきが大きいものから降順に並べてある）。

⁸ 例えば、「漢字使用が極端に少ない」「一般の日本人にはなじみのない単語を多用し、それらの単語の意味が説明されていない」などの理由である。

表 4 分析対象とした作文に関する情報

作文ID	評定者数	N平均	N順位	C平均	C順位	T平均	T順位	N sd	C sd	T sd
th013	10	1.70	79	2.10	73	2.00	67	1.06	1.52	1.49
hu005	9	2.22	50	2.33	63	2.00	67	1.39	1.32	1.41
cn004	9	2.56	34	3.00	29	2.67	31	1.13	1.50	1.22
kr190	10	2.60	30	3.00	29	2.60	33	1.17	0.94	1.17
in002	10	2.30	46	2.40	57	2.30	51	1.06	1.07	1.16
kh066	10	1.70	79	2.10	73	1.90	72	0.95	1.20	1.10
cn034	10	2.40	39	2.60	47	2.60	33	1.26	1.26	1.07
be005	10	2.30	46	3.10	25	2.60	33	1.25	0.88	1.07
ml005	10	2.40	39	3.10	25	2.60	33	1.17	0.99	1.07
be030	10	2.30	46	2.40	57	2.40	45	1.06	1.26	1.07
kh010	10	1.20	103	2.00	79	1.70	87	1.23	1.05	1.06
fi010	10	2.20	51	3.22	18	2.70	28	1.32	0.67	1.06
mn007	10	1.80	72	2.30	66	1.89	77	1.03	1.16	1.05
cn015	10	1.50	86	2.00	79	1.80	78	1.18	1.15	1.03
cn044	11	2.18	54	2.64	45	2.36	49	0.98	1.21	1.03
kh050	9	2.00	60	1.67	94	1.67	93	1.22	1.00	1.00
cn035	10	2.70	24	2.40	57	2.40	45	0.67	1.17	0.97
fr087	11	1.73	77	1.09	110	1.55	95	1.27	0.83	0.93
sg075	10	1.90	65	2.10	73	1.90	72	1.20	0.74	0.88
kr174	10	1.70	79	2.40	57	1.90	72	0.95	1.35	0.88

3.2.1.3 評定者

第1次調査のときとほぼ同じ条件（ただし今回は、「外国人に対する日本語教育の経験を持たないこと」という条件を追加した）で、同じ人材派遣会社に依頼し、20名の日本語母語話者を派遣してもらった。うち5名は、第1次調査の際にも評定者として協力して下さった方であった。全体として、第1次調査の際の評定者と、ほぼ同じような言語背景を持つ評定者集団であると考えられる。

評定者の年齢は25歳から50歳、男性7名、女性13名であった。1日につき5名の評定者に協力を依頼したため、調査には4日を要した。

3.2.1.4 評定手順

3.2.1.4.1 評定

評定者に、20編の作文を1つに綴じたものを渡し、おかしいと思うところ、意味が分からないところに下線を引いてもらい⁹、そのおかしさ、分からなさの重篤度を1~3の3段階で評定してもらった。

ひとつの作文を読み終わったところで、別紙「コメント票」に、まずその作文に対する5段階での評点¹⁰を記入してもらうとともに、その作文に対するコメントを自由に書いてもらうこととした。

⁹ 第2次調査では、作文内に存在する個々の問題点を詳細に指摘してもらうより、評定後、全体的な印象に関するインタビューの方に重点を置きたかったため、「おかしさ」の評定と「分からなさ」の評定とを特に分けずにおこなうこととした。

¹⁰ 同様に評点についても、「全体的評価」のみをつけてもらった。評定方法は第1次調査と同様、A B C D Eの中からひとつに○をつけてもらった。第2次調査における各作文の評定平均値、評点sdは、論文末に「添付資料1」として掲出した。

3.2.1.4.2 評定水準の調整

評定者には学習者に対する日本語教育の経験はなく、多くの評定者は日本語を母語としない人の日本語作文を読むこと自体初めてであった。評点をつけるにあたっての水準判定は個人によってかなり差があることが予想されたため、水準の判定を調整するため、実際の作業に先立って以下のようなことをおこなった。

まず、「練習」と称して、評定者に 2 編の作文¹¹を実際に読んでもらい、下線引き、下線部の重篤度評定、全体評定、という作業をひと通りしてもらった。実はこの 2 編の作文は、第 1 次調査において全体評価の平均値がもっとも高かった作文(in055)と、もっとも低かった作文(ml035)であったが、そのことは評定者には告げず、自分の感覚に基づいて評定作業をしてもらった。

その結果、2 つの作文に対する評点には個人によってばらつきが見られたが (in055 : 最高 A, 最低 C, ml035 : 最高 D, 最低 E), ml035 の方を in055 より高く評価した評定者はいなかった。

評定終了後、これらの作文が、前回の同種調査において最高点と最低点を取ったものであることを説明し、in055 を A の目安、ml035 を E の目安と考えて評点をつけてほしい、と依頼した。

3.2.1.4.3 事後アンケート

すべての作文の評定作業が終わった時点で、評定者全員に「事後アンケート」に答えてもらった。これは、今回評点をつけるにあたって、学習者作文が備えているさまざまな特徴のうち、どのような特徴を特に重視したか、を問うものである。20 の項目（「文字が正しく書けていること」、「文章の流れが自然であること」など）が列挙されており、それぞれについて「非常に考慮した」場合を 5、「まったく考慮しなかった」場合を 1 として 5 段階で答えてもらった。

3.2.1.4.4 インタビュー

3.2.1.4.4.1. インタビューの手順

評定作業が終わったあと、評定者をひとりずつ別室に呼び、ひとり 20 分から 30 分をかけてインタビューをおこなった。インタビューはすべて筆者（宇佐美）がおこなった。

時間の関係で、評定をお願いした 20 編の作文すべてについてインタビューをおこなうことはできない。そこでインタビューでは、最初に評定作業全体についての感想を聞いた後で、あらかじめこちらで指定した 5 つの作文について（選定された作文と選定理由については後述）、詳細な感想を聞くとともに、評点をつけた理由を自由に話してもらった。その後、「評価がばらつく要因」と考えられる点について評定者が具体的にどう考えているかを

¹¹ 作文の実物は、論文末の「添付資料 2」参照。

確認するため、インタビュアーからも質問をおこなった。

5つの作文についてのインタビューのあと、すべての作文に対してつけられた評点を概観し、特に高い点、低い点がつけられている作文について同様のインタビューをおこなった。最後に、今回評点をつけるにあたって、具体的にどのような観点に着目したかについて、「事後アンケート」の結果も見ながら具体的に話を聞いた。

インタビューは許可を得て録音し、文字化して分析に使用した。

3.2.1.4.4.2. インタビューの対象とした作文の選定

全員にインタビューをおこなうこととした作文は全部で5編であった。3.1.2節で分析をおこなった3つの作文(th013, cn004, in003)のほか、以下2つの作文についてもとくに興味深い特徴を備えていると考え、インタビューに使用することとした。

<in002>

論理的にかなりの不備のある作文の代表としてこの作文を選んだ。以下に全文を掲出する。

in002

この世界の中ではいろいろな公害汚染の中で主なものは大気汚染です。大気汚染の一番要素は煙*です。煙*は産業だけではなくたばこ吸ったときも生じる。たばこを吸うとき自体だけわるくなるではなくて、自のまわりの人々の健康を悪くなる。一般的に喫*煙者は喫*煙室にたばこを吸っていた。けれど公衆場所でたばこを吸う人が多い。それはよくないと思う。

たばこ吸うことは自分の権利ですけどまわりの人々を煙*をのませる権利が持っていないと思う。たばこが体のため悪いです。たばこの中ニコチンと言う有毒塩基がある。それをもちいると病気になるとちがない。またたばこのコマーシャルは子どもにも悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ。たばこをやめるほうがいいと思う。

たばこをやめるため法律を付けない方がいいです。もし喫*煙*者が社会にたいする責任についてかんがえればたばこをやめるかもしれない。

この文章の書き手は、たばこに対して反対の立場に立っていることは明らかであるが、最終段落では「たばこをやめるため（やめさせるための？）法律を付けない方がいい」といっており、それ以前の段落とのつながりが分かりにくい。おそらくは、「たばこをすわないうようにした方がよいが、法律によって強制的にやめさせるようなことはすべきでない」というようなことを主張したいのではないかと思われるが、ことば足らずであるためにそのことが読み手に十分伝わるとは限らない。

第1次調査における評定者コメントの中でも、

- 文法がおかしいが読みやすい。ただ主張が見えない(5016)
- 何を主張したいのか、よくわかりません(5017)
- いいのか？悪いのか、どっちなのか、はっきりしない。文章が、少しわかりにくい。(5018)

のように、主張が読み取れない、というものがあつた反面で、

- タバコは、自分の体にとっても周りの人の体にとっても良くないが、法律で規制するのではなく、喫煙者が自主的にやめる方向へ進んでほしいという意図はわかり易かつた。(5020)

のように、書き手の意図をかなり明確に推測しているコメントも見受けられた。

インタビューでは、筆者の最終的な主張が何であるかが読み取れたか、というところを中心に質問することとした。

<kh010>

これは、全文がひらがなとカタカナだけで書かれている作文である。評定対象とした作文の中には、漢字の出現率がかなり少ないものもあつたが、全文に漢字が 1 文字もない、という作文は他にあまり例を見ない。漢字がまったくない文章に対し、一般母語話者がどのような反応を返すのかを調べるため、この文章についてもインタビューの対象とすることとした。

kh010

アンコールワットしだいのあとで、カンボジアはだんだんよくなりました。このくにはせんそうがありましたから。こんなにはなしたとき、カンボジアは、アンコールワットしだいのまえにはせんそうがなかったわけではないです。でもそのとき、みんなカンボジアのしどうしゃがぜんぶで、きがつよいひとをして、どうどうといろいろなことなさいました。がいこくのくにからじぶんのくにをだいじにまもっていました。たとえば、チャム、チワなど。いっぽう、カンボジアこくはそれらのしどうしゃにおおきくされました。しかし、そのしだいのあとで、カンボジアはいままでだんだんよわくなっています。それで、まいにちがいこくのえんじょがいます。せかいのなかにはおかねもちのくにがおおい。たとえば、にほんやアメリカなど。かれらはカンボジアをいつもたすけています。カンボジアはびんぼうなくにで、ちしきがあるひともあまりいない。だから、いろいろなことができない。れいとして、せんきゅうひやくきゅうじゅうさんねんのせんきよです。とてもよくて、ちのうてきなしどうしゃをえらぶように、みんなカンボジアじんはせんきよしなければならぬ。そのとき、おかねとほかのことがいちばんいりました。びんぼうなので、がいこくからえんじょをようきゅうしました。とくべつにこくさいれんごう。かれらはこのくにをつよくてつだいました。せんきゅうひやくきゅうじゅうのせんきよはおこないました。ですから、えんじょはびんぼうなひとにからするととてもひつようなものです。もうひとつのえんじょはこうずいのえんじょです。さいきん、カンボジアがおおきい

こうずいがあります。カンボジアせいふはできるだけこうずいでむずかしさをもらうひとびとをたすけていて、おかねもちからえんじょをようきゅうしています。おかねもちはカンボジアせいふにえんじょをさしあけています。せいふのひとはこうずいでむずかしさをもらうひとびとにえんじょをあげました。

3.2.2. インタビュー分析

以下、それぞれの作文についてのインタビュー結果から分かったことを述べる。

3.2.2.1 th013

第1次調査で総合評価のばらつきが最も大きかった作文である（原文は35～36ページに掲出）。第2次調査における評点の平均（A:4点、E:0点として数値化）とそのばらつきは、

評点平均： 1.90（20作文中16位）

評点ばらつき： 0.97（20作文中8位）

であった。

3.1.2.1節での分析により、この作文には1) 結束性が十分に保証されていない、2) 一般的日本語母語話者にとってなじみのない語が説明なしで使用されている、3) 儀式の核心部分の説明にまったく意味不明の文が混じっている、などの問題点があることを指摘した。

コメント票のコメントや、実際のインタビューにおいても、「全体的に言っていることは理解できる」、「理解はできるが、かなり苦労した」、また、「言っていることがあまりよく理解できなかつた」¹²という意味の発話が混在して得られた。そこで、評定者が実際のところ、この文章の内容をどの程度まで理解できたかを確認するために、「プーモンコン式は予言をおこなう式であるようだが、具体的に何がどうなったときに、どういうことが予言されるのか」が十分理解できたかどうかを尋ねることとした¹³。

すると、評定者20名中16名は、「牛の前に10種類の食べ物を並べ、牛がどの食べ物を食べたかによってその年どういう農作物がよく取れるかを占う」ということが理解できているものと判断された。一方、「予言の方式についてはまったく意味が取れず、前後の文脈を用いても推測できなかつた」と明言した評定者は2名であった。その他1名は、「予言に基づいて牛が何かを食べる」と答えており、誤解をしている可能性が高いと判断される。またもう1名は、「目は通したがあまり興味がなかつた（きちんと読み取ろうと努力しなかつた）」と答えており、誤解をしている可能性が高いと判断される。

¹² コメント票のコメントや発話内容で、「丸ゴシック体」で表記した部分はコメントや発話内容そのままの引用であることを、地の文と同じ「明朝体」で表記した部分はコメントや発話の内容を筆者が要約したうえで掲出していることを示している。

¹³ 質問の際にはここに挙げたような形での質問をおこない、評定者自身が理解した予言の内容を自ら説明してもらった。

った)」と答えていた。

「予言」の内容を理解できたのが 20 名中 16 名、というこの数字を、多いと考えるか少ないと考えるかは微妙なところである。いずれにせよ、「牛が、どの食べ物を食べるかによってその年の農作物の出来を占う」ということはこの儀式の核心部分であり、最低限この部分が理解できていれば、「全体的に言っていることは理解できる」とは言えないわけではない。th013 に対する全体評価として「B 評価」¹⁴（5 段階評価の第 2 段階）をつけた評定者は全員、予言の内容については理解できていた。

しかしながらもちろん、この部分さえ理解できれば高い評定がつくというわけではない。儀式の核心部分は理解できたが、それでも低い評点（D 評価）をつけた評定者は、以下のような感想を述べている¹⁵。

- uy¹⁶ 全体的なご感想はいかがでしたか、この th013 について。
- 6011 全体的にスムーズに読めたかっていうと、真ん中の文章の部分ですごく、非常に、不明な部分があって、考えながら読まなきゃいけないようなところがあったので、そういう意味では、ちょっとあまりスムーズには読めなかったということで D にしています。（中略）
なんとなくわかったけれども、それを考えながら、こういうことかな、って考えながらじゃないと、意味、なかなか読みとれなかったと。
- uy どういうところがいちばん気になりましたか？
- 6002 例えば、お酒を「飲む」とか、例えば、食べ物を「食べてあげます」、牛が食べるのに、「食べてあげます」とか。あとこれ、なに、「もみ」ですか、粬を「まいます」、
- uy 「まきます」なんでしょうけどね。
- 6002 とか、だから、なんていうんでしょ、主語と述語が一致しないとか。あと、「田になる準備をします」。田んぼが自分で何かになるみたいな。

全体的に、1) 意味は分かってもかなりの推測を強いられた、という点(6011)、2) 意味は分かっても不自然な箇所が多い(6002)、という点が低い評点をつける理由として挙げられていた。

また、説明中タイ語の単語が何の説明もなく出てくることに違和感を持ったかどうかも尋ねた。これについては、多くの評定者が、「外国の話だから仕方がない」「読んでいくうちに分かると思った」「未知のことに興味があるので、むしろ興味が持てた」のような反応

¹⁴ この作文に対し、A 評価をつけた評定者はいなかった。

¹⁵ 以下のインタビュー文字起こしにおいては、話の内容にあまり関わらないと思われるフィラーやあいづち等は省略されている。

¹⁶ インタビュアーである筆者（宇佐美洋）である。以下同じ。

を返しており、「違和感がある」「もっと説明をつけたほうがいい」のように、明示的なマイナス評価をくださった評定者は20人中3名のみであった。この文章はタイの行事を紹介する、という目的を持つものであるため、使用されている単語が多少分からなくても、それはあまり大きな問題にはならない、と判断されるようである。

しかし、たった1名であるが、「読み手に対する配慮のなさ」を厳しく指摘した評定者もいた（評定はC）。この評定者はコメント票に、「おおよその内容はわかるがストレスを感じた。タイを知らない人が読んでもわかるようにしようとする心遣いのなさが原因」というコメントを記していたので、このことについて詳細に聞いてみた。

uy （コメントを引用して）どういうところでそれをいちばん感じましたか？

6006 まず、文章の構成がですね……。まずこれ、タイの人の話だ、というのが、（読み手は）知らないわけですよ。で、そこで、「サナムルウン」とか「ブーモンコン」といわれても、いったい何の単語なのかが分からない。で、いきなり来たので、なんだこれは、と思いました。で、最後によやっと「タイは農業国ですから」という部分で、あ、タイの話なんだと分かったと。それまでずっと、分からないまま読み続けるっていうことがストレスでした。（中略）

人にもものを説明するときって、これから、例えば「順序について説明します。まず第一にこうです。第二にこうです」って、そういう枠組みを提示してから内容を始めますよね。この人の場合には、ある程度相手が分かっていると思って、思いついた順に書いている気がするんですよ。そう言われても、この人とぼくはバックグラウンドがぜんぜん違うので、もう、そういう語り方をはじめた時点で、興味を失ってしまった、というのが正直なところですね。

この評定者も、6011の評定者と同様、「意味は分かっても読み手にかなりの推測を強いる」という点を問題にしているように見える。しかしながら、単に読み手としてのストレスに言及するだけでなく、書き手が読み手に対して十分な配慮をおこなっていない、という、「コミュニケーションにおける基本的な態度」を問題にしており、この点で他の評定者とはやや異なっていた。

また別の評定者は、「細かいところまで理解したい、という気持ちがあつて読み込んでいるが、細部がどうにもよく分からないために低い評点をつけた」ということを述べていた（評定はD）。

uy 全体的なご感想からお聞きしてよろしいでしょうか。

- 6017 はい、最初読み始めたときは、読みやすい文章かな、と思ったんですけども、読み進めていくうちに、言い回しがよく分からなくて、結局、なんとなく言いたいことは分かるけど、細かい話の内容が私は理解できなくて、で低い評価にしました。(中略)
なんで突然二人の女性が出てきたかもよく分からなくて。
- uy ああ、そう、確かに唐突にねえ、二人の女性が出てきて。
- 6017 これが二頭の牛と何か関係があって、一人ずつに女性がついているのかなあ、と思って読み出したんで、分からなくなってきたんですけど。
- uy ああ、じゃあ、細かく理解したい、と思って読むんだけど、でも細かいところが分からなくて、という感じ？
- 6017 そうですね、大体の話としては、農業のための祭典があって、その儀式の内容を書いてて、っていうぐらいは分かるんですけど、しっかり理解しようとするとならない。

他の評定者で、「二人の女性と二頭の牛」との関係にまで言及した人はいなかった。この評定者は、儀式の概要がなんとなく分かるだけでは満足せず、儀式の細部まできちんと理解しようとしていることがうかがえる。つまり、他の評定者が、儀式の概要がなんとなく分かればそれで「理解できた」と判定しているのに対し、この評定者は、「理解できた」と判定するための要求値がかなり高いところにあるものと思われる。

インタビューの最後の部分で、この評定者(6017)は、評定作業全体を振り返って、『「たばこについてどう思うか』というような意見文についてはあまりこだわらない(自分としてあまり関心はない)が、「外国の行事」のように事例を紹介する文になると突然こだわりだす」という意味のことを発言していた。関心のある話題であるがために細部まで読み取りたいと思い、しかし求める情報が十分に得られないために評価としては低くなってしまふ、ということであると思われる。

反面、この評定者とはまったく逆の考え方をした評定者もいた(評定はB)。

- 多分、これを書いたタイの方が、自分の国の行事みたいなものを説明してる。こういう・・・、多分牛が、牛に食べ物をまいて、何を食べたかで予言があるんですけどっていうようなこととか、宗教的な儀式、王様を囲んでの儀式みたいなものを説明しているのはすごくよく分かる。分かるというか、なんとなく・・・。外国で起こっていることなので実際は分からないんですけど、現地の人の紹介というか、そういうのすごくなんか、非常に興味深いというか・・・。作文としてはなんか・・・、文章としてちょっと魅力的な感じは、はい。(6005)

発言内容から考えると、この評定者は文章の概要は把握できているが、細部までは詳細

に理解できているわけではないようである。しかしながら「話題に興味があり、文章に魅力を感じた」と述べており、このため評点も B というかなり高いものをつけている。「文章の内容に興味を感じた」ということが、6017 の評定者と 6005 の評定者とでは、評価においてまったく逆の方向に働いていたらしいということが分かる。

以上、th013 という学習者作文に対する評定者のさまざまな反応を見てきた。ここまでの分析で得られた知見をまとめると、以下のようになる。

- ・少なくとも 16 名の評定者は儀式の概要は理解できていたが、儀式の核心部分が理解できなかった評定者も若干名いた。
- ・儀式の概要が理解できた、という理由で高い評点を与えた評定者がいる反面、それだけでは高い評点は与えない評定者もいた。
- ・「文章の概要は理解できたものの高い評点を与えなかった」理由には、以下のように多様であった。

- ＊理解するにあたって読み手にかなりの推測を強いる (6011)

- ＊日本語として不自然な表現が多かった(6002)

- ＊書き手に、読み手への配慮が不足している(6006)

- ＊概要は分かったが細部が分からなかった(6017)

- ・「文章の内容に関心を持った」ということは、プラスの評価に結びつくこともあるが、「興味を持ったのに細部が読み取れない」という理由でマイナス評価に結びつく場合もある。

3.2.2.2 hu005

第 1 次調査で総合評価のばらつきが 2 番目に大きかった作文である（原文は 37-38 ページに掲出）。第 2 次調査における評点の平均とそのばらつきは、

評点平均： 2.20 (20 作文中 13 位)

評点ばらつき： 1.06 (20 作文中 4 位)

であった。

3.1.2.2 節での分析により、この作文には 1) どのような話題について語ろうとしているのかが明記されていない、2) 文章中に意図不明の文が挿入されている、3) 文章の構成は一応意識されているが、それが明示的でない、などの問題点があることが指摘された。インタビューでは、書き手はどのような話題について語り、最終的にどのような主張をしているのか、ということを探ることとした。

予想通り、多くの評定者にとって、この文章がどのような話題について書かれているか、最終的にどのような主張をしているかをとらえることはかなり困難であるようだったが、ま

まったく不可能というわけでもないようであった。「最終的にどういう主張をしていたか」という質問に対しては、20名5名が、

- 日常的に、例えば英語とかを使っている医者だったりとか、そういう専門レベルの人はかなり高い英語知識、というか言語知識が大切だということですね。で他の、ちょっとしか外国人とかに触れない人であれば、中級レベルのものが必要ではないかと。(6011)
- 専門学者などは、その分野において、ビジネスぐらいまでマスターしなければいけないけれども、そうでない方は浅く広くやったほうが良い。(6018)

のように、hu005 が「場合を分けた主張」をしていることを踏まえた回答を返していた。しかしその他の評定者は、「その国にいるのであればその言語が使えたほうがいい。英語はできたほうがいい」(6001)、「外国語はマスターした方がいい」(6003)、「ベースとして英語を習得すべきで、特殊な仕事をする人は、それプラス別の言語もできたほうがいい」(6013)など、話の趣旨をかなり誤解しているか、あるいは「言葉について書いてあるのは分かるが主張は(分からない)」(6008)、「前半では英語の話だが、話の切り替えが行われなまま日本語学習の話になってしまっており、何の話をしているのか分からない」(6005)などと答えていた。また、第1次調査のときと同じく、「1文1文は分かるが、全体を通して読むと分からなくなる」という趣旨の発言をした評定者も少なくなかった(6002, 6003, 6008, 6017)。

特筆すべきことは、コメント票には「言いたいことは理解できた」という意味のことを記載した評定者であっても、詳細に話を聞くと、「文章を読んだときは理解がしやすいと思ったが、今改めて読み直してみるとやはり分からない」と答えることがあったということである。評定者によっては、th013の場合と同じように、文章全体の雰囲気なんとなく分かるとそれで「理解できた」と答えてしまうことがあるようである。

「評価にあたって文章の内容はほとんど考慮していない」という発言も見られた。6013番の評定者(評定はB)は、「この問題」が何を指しているのかについて、最初読んだときにはほとんど気にしていなかった、という発言に続けて、以下のようなことを述べている。

- 6013 なんか私は、文章の、言いたいことだとか、意見だとか、そういう組み立てよりも、この文を理解しやすいかどうかというのを全体的にポイントを置いたので、起承転結があるだとか、そういうのは、まだあんまりそういうレベルじゃないのかな、と思って。全体的に。なのでちょっとそこのへんは気にせずに・・・。
- uy 中身よりも、さっと読んで意味が分かるかというところに重点を置いた。その点では非常に評価は高かったというですね。

6013 はい。

その逆に、文章の内容の妥当性に敏感に反応した評定者もいた。6020 番の評定者（評定は D）は、コメント票に「内容が浅薄。あまり面白くない。本人がもり上がっているだけというふんいき」と書いていたため、具体的にどういうところでそう感じたかを聞いたところ、以下のように答えていた。

6020 例えば、「英語をマスターするのに、専門家は 80 パーセントぐらいはマスターしなきゃだめだよ」とか、「よく外国人と接する人だったらば 2、3ヶ国語は話せたほうが良いよ」とか、その人その人なりに、これだけ必要だってのはなんか分かるんだけども、なんかちょっとこう・・・、理由付けっていうかその、支えるところがちょっとよく分からないってのかな、なんていうか・・・。（中略）

uy ただこれは、一文一文で見ると、かなりよくできてるというか、間違いは少ないですよ。でも、そのようなところよりも、内容的なところをより重視されたっていう感じでしょうか。

6020 そうなんです。全部読んだ後に、だから？ っていう感想になってしまうという感じですね。

この評定者は、「外国語を、専門家は高いレベルまでマスターしなければならないが、よく外国人と接する人であれば複数の言語を学ぶのがよい」という、「場合を分けた主張」をしているということはきちんと理解できている。しかしながら、なぜそういうことが言えるのか、その理由が理解できない、ということを描している。つまり、文章で主張する内容は理解したが、主張を支える論理が理解できなかった、ということなのであろう。

この作文についてのインタビューから分かることは、ひとくちに「理解できる」といっても、

- *一文の中で表現されている事柄が理解できる。
- *文章の構成が理解できる。
- *文章を支える論理が理解できる。

など、「理解」にさまざまな質の違いがあり、評定者が「理解できる」といったとき、どういう意味での「理解」ができているのかを考慮に入れる必要がある、ということであろう。

3.2.2.1 節では、「理解の深さ」にさまざまな段階がある、ということを描いた。ここで述べたことも、一見すると 3.3.2.1 節で述べたことを再び繰り返しているだけのように思えるかもしれない。しかし、3.3.2.1 節で述べたことは、言語として表現された内容がどの程

度理解できるか、という「量」の問題であった。ここで述べたいのは、上記 3 種類の理解は理解としての次元がやや違う、という「質」の問題なのだというを、ここで改めて強調しておきたい。

3.2.2.3 cn004

第 1 次調査で総合評価のばらつきが 3 番目に大きかった作文である（原文は 40 ページに掲出）。第 2 次調査における評点の平均とそのばらつきは、

評点平均： 3.00（20 作文中 2 位）

評点ばらつき： 0.92（20 作文中 9 位）

であった。

3.1.2.3 節の分析では、この作文は構成に問題点があることが指摘された。しかしながら第 2 次調査のインタビューにおいては、構成の問題点について言及した評定者は非常に少なかった。マイナス評価として指摘されたのは、「文中にブランクが空いている¹⁷」「『たばこが生きている』などの不自然な表現が多い」など、主として形式面に関する事柄であった。「主張とは直接つながらない話を、脈絡なく書いている」、ということ自ら明示的に指摘した評定者は以下の 1 名のみであった（評価は D）。

- この「けれども」も、「日本の問題だけではありません」のあとに「けれども」っていうのは、続かないんじゃないのかな、って思いますし。「けれども解決できない」っていうふうには。
- 流れがちょっとふらふらっ、ふらふらって、こう・・・、結局何を、何か一つのことは出てこない、ってというのが最後までありますね。（ともに 6015）

しかしその他の評定者は、こういう点について特に否定的な評価をしているわけではなかった。そこで質問者の方から、「この文章には主張とは直接関係しない話題が脈絡なく提示されているのではないか」ということを指摘し、そのことについてどう思うかについて問うてみたが、その際にも、「むしろ筆者のたばこに対する強い意見が感じられてよかった」（6012）、「hu005 では、（さまざまな話題を）ボンボンボンと出しているだけであるが、cn004 では骨組みが感じられた」（6020）というように、比較的好意的な回答が得られた。

インタビューの発言内容から推測すると、6020 の評定者が言う「骨組み」とは、「たばこに反対、という筆者の基本的態度」を指しているものと思われる。最終的な主張とは直接関連しないまでも、「基本的態度」とは何らかの意味で関連する話題が提示されているので、

¹⁷ もっとも文中のブランクについては、多くの評定者がそれによる読みづらさを指摘する反面、1 名のみであるが、「読点がないが、空白が入っているので、それが切れ目になって読みやすかった」（6017）と発言した評定者もいたことを指摘しておく。

全体として大きな違和感はなかった，ということのようである。

「構成が悪い」というコメントが少なかったもうひとつの理由としては，以下の評定者（評価は C+）が述べるように，「1 段落内では 1 つのことだけを述べている」ということが考えられる。

- uy 話の流れというか，全体的な構成についてはいかがでしたか？（中略）
6004 んー，そうですね，やや稚拙な感じはしますけれども，そんなにひどいとは，私は思わなかったですね。最初のところで，キャッチーなつかみがあって。最初のセンテンスでつかみをいれて，その次のパラグラフで，というふうに，そのパラグラフごとに意味内容は変えているので。
- uy それは重要な指摘ですね。パラグラフごとに一つのことを・・・
6004 一つの意味，一つの意味と。
- uy というふうになっているので，まあ構成そんなに悪いっていうふうには感じなかった，ということですね。
6004 はい。

つまりこの評定者は，cn004 では一段落内での一貫性(coherence)が一応保証されているため，文章全体としての一貫性についてはあまり気にしなかった，ということであると思われる。

th013 についてのインタビュー分析により，評定者により「理解できた」と判定するための要求値がかなり違うらしいことを指摘した。同様に，「文章の論理性」という観点についてもさまざまな段階があるということをも，以下の評定者（評価は A）のコメントは暗示している（下線は引用者）。この評定者は，インタビューでの会話の中で，文章の流れがややぶれていることに自ら気づいたあとで，続けて以下のように発言している。

- なんていうか，この人が，たばこについて思うこともろもろを話したんだろうな，というふうに理解したんですよ。だから，必ずしも，もともと多分この人は，たばこについて主張がある人じゃなくて，無理やり主張させられてんだな，と，いうところまでちょっと見て，でもそのわりに，この人が頭の中で思った順に思ったことが素直にこっちに見て取れる，っていう点で，分かりやすいかな，と。けっこう，いま，インターネットでもそういう文章すごく多いので，だから，入試問題の小論文とは違って，人間のコミュニケーションとしては別に結論がなくても，まあいいんじゃないの，という部分はあります。(6006)

下線部で暗示されているのは，「文章に求められる『論理性』は，場面によって違っていい」という認識であろう。cn004 の作文は，「入試問題の小論文」として通用するほど

の論理性は備えていないかもしれないが、「書き手が考えたことが読み手に素直に伝わる」だけの明瞭性は備えていると判断されるために、今回の評定では高い評価を与えたと述べている。

では、この評定者が採点において最も優先した観点は何かであったか。それは、「書き手と読み手との間でどの程度深いコミュニケーションが成り立ちうるか」ということであったかと思われる。この評定者は、すべてのインタビューを終える直前、採点作業全体を振り返って以下のように述べている。

- **たぶん、インターネットで書き込みをしたら、そういう能力（注：読み手にどういう情報を提示すればよく分かってもらえるか、配慮ができる能力のこと）がある人のところにたくさんレスがつくと思うんですよね。だから、文章がまとまってなくっても、生き生きと、言いたいことが伝わってくる、完璧に伝わらなくっても、なんか新鮮さがあれば、こっちも（レスを）返したくなるんですよね。たぶん会話でもそうだと思うんですけど。けっこうこの採点は、もしこれを書いた人が目の前にいたら、会話したくなる度合いかもしれないです。（6006）**

ここで興味深いのは、文章を評価する際の基準として、「文章を読んで、さらに詳細な話を聞きたくなる度合い」という観点が示されているところであろう。そしてそのためには、文章中に、読み手に対する配慮がなされていることは不可欠な条件であるが、「文章のまとまり」や「情報が完璧に伝わること」は必ずしも必要な条件ではない、ということも述べられている。

そのような観点からもう一度 **cn004** を読み直してみると、確かに「たばこ問題解決のための提言」としては詰めの弱いところはあるが、「筆者自身のたばこに対する思い」を読み手に語りかける文章と考えた場合、必ずしも大きな問題をかかえているとはいえない。また、たばこをめぐるさまざまな話題を提示しているため、こうした話題をきっかけに読み手自身がたばこの問題について思いを深めることもできるといえるかもしれない。

つまり、主張のある「意見文」の場合、「主張自体の整合性・実効性」という観点から評価をおこなうことができ、その場合 **cn004** には必ずしも高い評価を与えることはできないのであるが、「文章をきっかけに書き手と読み手がコミュニケーションをおこなうことができるか」という観点から見れば、比較的高い評価を与えることも不可能ではない、ということになるのであろう。

3.2.2.4 in002

前述の通りこの文章は、筆者がどのような主張をおこなおうとしているのかが非常に分かりにくい例としてインタビューの対象としたものである（原文は 46 ページに掲出）。第 2 次調査における評点の平均とそのばらつきは、

評点平均： 1.65 (20 作文中 18 位)

評点ばらつき： 0.88 (20 作文中 12 位)

であった。

インタビューでは、「たばこをやめたほうがいいと言ってきたのに、最後でたばこをやめない法律を作らないほうがいいというのが分からない」という意味のコメントが見られた(6005, 6011, 6014, 6019, 6020)。最終段落とその前までの段落との関係が推測できていたことをはっきり述べていた評定者は1名のみであった(評定はC)。

- 法律として義務化していくんではなくて、個人個人の責任意識を高めて動くほうが、責任意識を深めることが大切なのではないかと。
- 法で罰するよりは、あえて個人の責任を・・・、個人個人でやめる、っていう、自分の決意とか意識が大切なんだろうっていう・・・。(ともに 6018)

一方で、最終段落とそれまでの段落のつながりが悪いが、読んでいるときにはそのことをほとんど意識しなかった、という評定者も少なくなかった(6007, 6008, 6015, 6017)。その理由として、以下のような発言があったのは興味深い。

- 多分日本人が書いてもこういうふうな展開にもってくと思うから、変だと思わない。重要視しないし、すんなり受け入れちゃうって感じなんですけど。日本人がしないことをするとすごく目に付くって感じで。(6017)

日本人でも段落間のつながりの悪い文章を書くことがある、というのはまさに指摘の通りであり、「一般的日本人と同レベルの文章が書ければよい」という観点から考えると、確かにここは大きな問題にならないといえる。しかし、果たしてそれでよいのか、というのはまた別の問題であろう。「現在の日本社会で一般的に流通している文章のレベル」というものが、果たして学習者作文を評価するための基準となりうるのか、ということについては十分な検討が加えられなければならないだろう。

またこの文章は「公害汚染」から話が始まっており、そこから「たばこ」のことに話を進めている。20名中4名の評定者(6004, 6011, 6019, 6020)は、「このつながりは妥当でない」ということを自ら指摘していた。例えば以下のような発言を参照のこと。

- 大気汚染という大きな問題からですね、たばこの煙というところに、結びつけ方がやや強引で、大気汚染の問題なのか、たばこによる害の問題なのか、どっちかに絞らないと。こちらの最初の出だしだと、大気汚染を論じるのであろうか

など思ってしまうわけで、でも結局はたばこの害についてという話に矮小されてしまうわけですから、ちょっとこう、問題のすり替えかなど。(6004)

- たぶん、喫煙が悪いって言うことは、言っているんですけども、それが大気汚染っていうところと、なんかつながらないんで……。たばこが悪いって言うことだけは、なんかこう、書いてあるって言うんですけど、最初に大気汚染って言うんですけども、その大きなテーマのところには戻っていないって言うか、たばこの部分だけで終始してしまっていて、ていう。(6011)

宇佐美(2006)では、「たばこの煙によって空は青くなくなり、木もなくなってしまう」という意味のことを書いた学習者作文(cn085)に対し、教師が何らかのコメントまたは添削をおこなっているかどうかを見た。この作文も、たばこの害を強調しようとして、つい「地球規模の大気汚染」という大きすぎる話に結び付けてしまった例であると言え、in002 と共通点を持っているといえる。

結果として、cn085 の上記の部分になんらかのコメントまたは添削をおこなった教師は33名中7名(21.2%)であった。奇しくもこの21.2%という割合は、今回の「20名中4名=20.0%」という評定者割合とほぼ一致する。もちろん調査した人数も少なく、調査方法も違うため単純な比較はできないため、過剰な一般化は控えたい。ここではただ、この種の問題(話題と話題との関係が、事実としてやや飛んでいる)に反応する人の割合は、教師も一般母語話者もそう大きく変わらないのかもしれない、という可能性を指摘するにとどめておく。

3.2.2.5 kh010

この作文は、全文がひらがなとカタカナのみで書かれている(原文は47-48ページに掲載)。第2次調査における評点の平均とそのばらつきは、

評点平均： 1.25 (20作文中最下位)

評点ばらつき： 1.07 (20作文中3位)

であった。

「こんなにはなしたとき」「きがつよいひとをして、どうどうといろいろなことなさいました」「とくべつにくくさいれんごう」「むずかしさをもらうひとびと」など、日本語として不自然な表現に対する違和感の言及(6003, 6005, 6009, 6012, 6013, 6020)もあったが、やはりもっとも顕著なコメントは、表記に関するものであった。大半の評定者は、コメント票のコメントまたはインタビューの中で、「ひらがなばかりで書かれている」ということについて否定的に言及していた(6001, 6002, 6004, 6005, 6007, 6008, 6009, 6011, 6012, 6014, 6016, 6017, 6018, 6020)。全体として、「漢字を使うべきなのに使っていない」という規範

的な態度からの言及というよりは、「ひらがなばかりだと切れ目が分からない」という「読みにくさ」への言及が大半を占めていた。また、「繰り返し使用される『しだい』が、『時代』なのかどうか、分かりにくかった」(6009, 6015, 6017)というコメントがあった(うち1名は、「しだい」が「時代」であることを最後まで推測できなかったようである)。

「ひらがなで書かれているがために、不自然な表現も気になり始めた」というコメントも得られた。

- ・おそらくこの人は、私が解釈したのは、カンボジアにもっと援助してほしいってことをいいたいんだろうな、ってところは分かったんですね。それが、わりと最初から最後まで一貫してる方かな、と思ひまして。ただやはり、ひらがなが・・・、漢字がほとんどない、っていう・・・、全然ないんですかね。で、あとは、「せんきゅうひゃくきゅうじゅうさんねん」まで、なぜひらがな？って、なんかそんな感じで思っ。で、とつぜん、そうなってくると、だんだん、ことば遣いや文法もだんだんちょっと気になってきてしまって、6行目あたりだと、「どうどういろいろなことをなさいました」とか、その前の「きがつよいひとをして」とか、そこがもう全然分からない、というような感じですね。(6020)

この評定者は(評定はD)は、文章全体の趣旨は読み取れたものの、漢字がないこと、特に年代までひらがなで書かれていることに違和感を持ち、それをきっかけに表現の不自然さも気になり始めた、と述べている。このことは、「漢字がないこと」と「不自然な表現」とが共起することにより、マイナスの方向への交互作用が起り得ることを示しているだろう。

しかしながら、ひらがなで書かれていることを否定的にはとらえていない評定者も少数ながらいた。例えば以下のような発言をした評定者である(評定はB)。

- ・漢字が少ないのはまあしょうがないことかな、と思うので。別に読めないわけではないので。内容も伝わるし。例えばこのところなんですけど、「そのとき、みんなカンボジアのしどうしゃがぜんぶで、きがつよいひとをして、どうどういろいろなことをなさいました」、これは、言いたいことは分かるわけですよ。でも文がまとまっていない。ぼくの主観として気持ちが悪いかといわれると、そんなに嫌な気、しない文章だったんですよ。何でかという、伝えようとしてることが、必死感が伝わってくるからなんですね。言いたいけれども言えないもどかしさだけど、でも、どうせ言っても分からないとかじゃなくて、一生懸命伝えようとしてるから。でそれを、それはこっちで汲み取ってあげるよ、っていう気持ちになれる、っていう。(6006)

この評定者は、前節において、「書き手と読み手との間で深いコミュニケーションが成り立つ」ということ評価基準として重視すると発言していた評定者であった。この評定者はこの作文の中から、書き手の「伝えようとする『必死感』」、つまり「コミュニケーションのための努力」を感じ取ったと述べている。そのため読み手としても、言語面での欠点を乗り越えて書き手の真意を汲み取ろうという努力によって報いようとし、結果として、読み手と書き手との間で十分なコミュニケーションが成立したと感じたのであろう。

このほかに、「外国の人が書いているという前提があれば、ひらがなが多いという点はあまり気にせず読んだ。間違った漢字よりはひらがながいい」(6015)、と答えた評定者(評定はD)、「ひらがなばかりで読みにくいが、小学校の1,2年生レベルと同じくらいと考えれば差し障りはなく、言いたいことは分かった」(6019)と答えた評定者がいた(評定はB)。

改めて kh010 を読み直してみると、確かに極めて読みにくく、日本語として不自然な表現も少なくないが、非常にシンプルな構文で書かれていて、「まったく意図不明」という文は意外に少ないのではないだろうか。「せんきゅうひやくきゅうじゅうさんねん」のように、年代もひらがなで書いていることに強い拒否反応を示した評定者は多かったが、その「年代」も実は正しく書けており(多くの拗音が含まれており、学習者にとって書きにくいはずなのに)、実質的な情報伝達にはまったく支障がない。もちろん、「段落を分けていないため、文章全体の構造が分かりにくい」という点と、「文章全体をまとめることなく終わってしまっているため、最終的に何を主張しようとしているのかが分かりにくい」という点はやや重大な欠点ではある。しかし落ち着いて読み込むならば、「カンボジアはアンコールワット時代が最盛期。その後戦争で国力が衰えてしまったため、現在は外国からの援助が必要となっている。具体的には、1993年の選挙や、洪水で被害をこうむった際に援助を受けた」という文章の流れを読み取ることは、十分可能なのではないだろうか。

にもかかわらず、結果としてこの作文に対する評点の平均は20編の作文の中で最低であった。その理由を最も端的にあらわしているのは、おそらく以下のようなコメントではないかと思われる。

- もうそれだけ(注:全文がひらがなで書かれていること)でですね、ある種こういうタイムトライアルのような、こういう限られた時間の場合にはですね、ちょっとそこまで優しさを発揮できないという、読み手にとって。(6004)

つまり、ひらがなで書かれているという理由だけによって、文章をしっかりと読み込もうという意欲自体を失ってしまった、ということである¹⁸。

この評定者(評定はD)は、前出の6006とはまったく反対に、「(内容を汲み取ってあげ

¹⁸ ただこの評定者はインタビューにおいて、「カンボジアは貧乏だと訴えるだけでなく、数値を示すなどの根拠もほしい」という内容に関わる発言もしていた。kh010が全文ひらがなで書かれていたからといって、決していい加減な読み方をしていたわけではないということは付記しておきたい。

る) 優しさを発揮できない」と述べている。このことを逆にいえば、読み手が内容を汲み取ろうとする努力をしていたら、評価はもっと高くなっていたという可能性を示しているだろう(この評定者はインタビューの中で、「読みにくい、時間がかかってしまう」とは発言していたが、決して「意味が分からない」とは述べていなかった)。

このように、ひらがなだけで書かれているという事実のみによって、表記以外の評価項目に対してマイナスの相互作用を与えてしまうこと、そのため全体として実体よりかなり低い評価が与えられてしまう可能性があるということは、十分留意しておくべきことであろう。もちろん現実問題として、漢字が極端に少ない文章に対して違和感をもつ日本語母語話者は少なくないこと、場面によっては表記の適切さも極めて重要となりうることは無視できない。しかしながら一方で、非漢字圏の学習者にとって漢字を書くことは極めて困難であること、普通漢字で書く語をひらがなで書いても、それを「誤用」と断じることができないこと、文章を書く目的によっては、「表記の適切さ」をあまり重視する必要がない場合もあること、などを考え合わせるとき、むしろ日本語母語話者側に、漢字の少ない文章に対し、いま少し寛容になるよう働きかけをおこなうことも考えられてよいであろう。

4. まとめ

今回の一連の調査でおこなったことと、そこから明らかになったのは以下のようなことであった。

4.1 第1次調査

学習者作文全 113 編を、それぞれ 10 名前後の異なる評定者に読んでもらい、評点・コメントを書いてもらった。113 編中で、評点のばらつきの大きかった作文を抽出するとともに、コメント・文章そのものを分析することにより、評点のばらつきをもたらした要因について考察した。その結果、「概要はつかめるが、細部が理解しにくい」(th013)、「1 文単位で見ると分かりやすいが、全体としての構成がつかみにくい」(hu005)、「文章の流れは自然であるが、主張が十分に練られておらず、文章の各部分同士の関係が不分明」(cn004)ということが評価のばらつきをもたらした原因として指摘された。また、th013 と cn004 には、「意図は理解できるが日本語として不自然な表現」、hu005 には、「1 文としては理解できるが、なぜそこにそのような文が挿入されているのかが分かりにくい文」があり、こういうところも評価をばらつかせた原因と考えることができる。

4.2 第2次調査

第1次調査で評点が大きくばらついた作文を 20 編選び出し、それを 20 名の異なる評定者に読んでもらい、評点・コメントを書いてもらった。さらに評定のあとインタビューをおこなうことで、評定者ひとりひとりが持つ評価観を詳細に聞き出した。その結果以下のようなことが指摘された。

4.2.1 th013 に関して

- ・th013 のような説明文を「理解できた」と判定するために、文章の内容がどの程度まで細部にわたって理解できていればいいかという「理解の要求度」は、評定者によってかなり異なる。
- ・「文章の概要は理解できたものの高い評点を与えなかった」場合の理由付けは、以下のよう
に多様である。
 - *理解するにあたって読み手にかなりの推測を強いる。
 - *日本語として不自然な表現が多かった。
 - *書き手に、読み手への配慮が不足している。
 - *概要は分かったが細部が分からなかった。
- ・「文章の内容に対する興味」は、評価に対してプラスに働くことがあるが、「内容には興味があるのに細部が分からない」というようなことがあるとマイナスに働くこともある。

4.2.2 hu005 に関して

- ・意見文を「理解」する、ということのなかには、
 - *一文の中で表現されている事柄が理解できる。
 - *文章の構成が理解できる。
 - *文章を支える論理が理解できる。
- など、互いにやや質の異なる「理解」が存在する。評定者が意見文を「理解できた」というとき、それはどのレベルでの理解を指しているのか、確認することが必要。

4.2.3 cn004 に関して

- ・「意見文」の場合、「主張自体の整合性・実効性」という観点から評価をおこなうこともできるが、一方「文章をきっかけに書き手と読み手がコミュニケーションをおこなうことができるか」という観点からの評価も可能。どちらの観点を優先するかによって、当然評価も変わってくる。

4.2.4 in002 に関して

- ・意見文の論理的不整合について、「日本人でもこういう書き方をする人はいるだろうから違和感を持たなかった」、という発言が得られた。「日本人の日本語レベル」が、学習者作文を評価するための基準となりうるのかどうかは、再検討されるべきである。

4.2.5 kh010 に関して

- ・ひらがなのみで書かれた文章に対しては、わずかの例外を除き、大半の評定者が違和感を表明した。とくに、「ひらがなのみで書かれている」ということと、「日本語とし

て不自然な表現がある」ということが共起していると、マイナス方向への交互作用が働く可能性が指摘された。

4.3 全体を通じて

今回の調査全体を通して指摘できることは、第一に「理解できる」ということのあいまい性である。評定者が同様に「この文章は理解できた」と言ったとしても、インタビューによって詳細に聞き出してみると、その理解の深さと質は、人によってかなり異なっているようであった。

ここから言えることは、文章の評価基準や水準記述として「文章の意味が理解できる」、ということだけを挙げることに意味が薄い、ということである。同様に、「よく理解できる」「あまり理解できなかった」のように、程度副詞によって理解の深さを表現することも再考の余地があるだろう。「細部まで誤解の余地なく理解できる」「細部には不明の箇所、または誤解の余地があるが、文脈によって補うことが可能である」などのように、できるだけ程度副詞を使用しない水準記述をおこなうことが有効であろうと思われる。

また、「理解の質」ということも明確に区別して記述されなければならない。少なくとも、「一文の中で表現されている内容が理解できる」「文章の構成が理解できる」「文章を支える論理が理解できる」という3種類の区別は必要であろうと思われる。もちろん、「理解の質」として、これ以外にどのような分類が可能であるかということも含め、今後さらなる検討が必要である。

第二に、文章の評価について考察する際、文章そのものの持つ性質について分析するだけでなく、評価をおこなう者の評価観についても十分な分析が加えられなければならない、ということが指摘できる。

田中他(1998)は作文評価時の観点として、「正確さ」「構成・形式」「内容」「豊かさ」という4つの因子を抽出した。この因子は、すべて文章そのものが持っている属性に関するものであった。つまり、文章が備えているさまざまな側面のうち、評価者が「どこに着目するか」ということを、4つの因子に整理して示したものといえる。

しかし今回の調査の結果からは、「評価行動」というものは、文章が備えている属性のうち「どこに着目するか」「どれを優先するか」、ということのみによっては説明しきれないことが見えてきたように思われる。なぜかといえば、ある文章が備えているまったく同一の属性に対し、評価者によってまったく別の(場合によっては正反対の)評価がくだされるということがあり得たからである。つまり、「どこを見るか」だけでなく、評価者がそこを「どう見ているか」ということについて、さらに詳細な分析が必要なのではないか、ということである。

実はこのことは、すでに田中他(1999)においても、『内容』『趣旨の明確さ』『構成』については、共通の基準で評価されていない」「今後これらの項目を客観的に測るための基準となるガイドラインの作成が必要」という形で指摘されている。今回の調査は、コメントや

インタビューという質的データの分析により、個々人がそれぞれに持っている評価の基準をきめ細かに探っていこうという試みであったといえる。

実際問題として、「内容」「趣旨の明確さ」「構成」といった項目を測るための、「汎用的な基準」が存在するとは思われない。こうした項目に関する評価基準は、静的な存在としてどこかに存在しているというのではなく、評価の目的に応じて（あるいは評価を統括する者の評価哲学に沿って）、動的に「定義」していくべきものであろう。当然、評価の目的が異なれば評価の基準は異なるはずであるし、目的によっては評価の項目そのものを増減するということもあるはずである。

問題は、そのようにして定義された評価基準と評価者個人個人の評価観とは、かなりずれていることがあり得る、ということである。今回の調査では、評価の対象となる文章は共通であっても、評価者が異なることによってまったく異なる評価がくだされる場合があるということ、最終的な評価にいたるまでのプロセスもまったく違っていることが明らかになった。もっとも今回の調査においては、評価の観点をこちらから指定せず、どういう基準で評価をおこなうかは個人の自由に任せたためにばらつきが大きくなった、ということとは考えられる。しかしながら、評価の観点（文章の中のどの属性に着目しているか）が同じであるにもかかわらず評価結果が大きく異なり得たことを考えると、評価の観点・基準さえ示せば信頼性の高い評価が可能になるわけでは決してないことも分かる。

今回の調査では、同一の文章を、同一の条件で評価してもらったとき、評価結果にどのようなばらつきが生じるかを示し、さらにそのばらつきの背後に、極めて多様な評価観が潜んでいるということをおおむね明らかにした。多様な評価観の全貌を明らかにするためには、さらに評価対象の文章、評価者の属性を変えてみることにより、さらに幅広い調査が必要であろう。

今後こうした調査を継続しつつ、最終的目標としては、「多様な評価観を分類整理し、評価観が全体としてどのような広がりを見せているのかを示す見取り図を提示する」とともに、「個人がある言語運用に対し評価をおこなうさい、どのような認知的処理を行なっているのかを説明できるようなモデルを提案する」ことを目指したいと考える。このようなモデルが提示されることにより、評価に携わる者は自らの評価観を相対化してとらえることができるようになり、評価の目的にあわせ、自らの評価観を調整していくことが今よりはるかに自由にできるようになるものと考えられる。また、評価基準を定義する側としても、評価者の評価観の広がりをあらかじめ把握しておくことによって、「評価観の異なる人に対し、今回自分が定義した評価基準を理解してもらうためにはどのような基準・水準の記述をおこなうのがよいか」ということについて、より効果的な戦略を練ることができるようになるものと考えられる。

参考文献

- 宇佐美洋(2006)「学習者作文に対する教師コメントの分析—実態の把握・分析と、そこから得られる提言—」『作文対訳データベースの多様な利用のために：「日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究」成果報告書』, 145-163, 国立国語研究所（本報告書にも再掲）
- 佐々木瑞貴(2004)「一般日本人は何に注目して学習者の文章を読むのか—旅行のアドバイスの場合—」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成 12 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書（研究代表者：小林ミナ） 197-214
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ(1998)「第二言語としての日本語における作文評価基準—日本語教師と一般日本人の比較—」『日本語教育』96号, 1-12
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里(1999)「第二言語としての日本における作文評価—「いい」作文の決定要因」『日本語教育』98号, 60-71
- Halliday, M. A. K.(1994) *An introduction to functional grammar*(2nd ed.). London: Edward Arnold ltd. (ハリデー, M. A. K(2001)『機能文法概説—ハリデー理論への誘い』山口登・笈壽雄訳, くろしお出版)

添付資料 1

第 2 次調査における, 20 名の評点平均と, 評点 sd

作文ID	評点平均	評点sd
cn035	3.60	0.68
cn004	3.00	0.92
cn034	3.00	0.97
ml005	2.95	0.83
kr190	2.75	1.02
be005	2.70	0.73
cn044	2.65	0.81
mn007	2.60	0.75
fi010	2.55	0.69
sg075	2.50	0.89
cn015	2.50	1.00
be030	2.35	1.09
hu005	2.20	1.06
kh050	2.10	0.85
fr087	2.00	1.34
th013	1.90	0.97
kr174	1.84	0.90
in002	1.65	0.88
kh065	1.25	0.85
kh010	1.25	1.07

(評点平均降順)

作文ID	評点平均	評点sd
fr087	2.00	1.34
be030	2.35	1.09
kh010	1.25	1.07
hu005	2.20	1.06
kr190	2.75	1.02
cn015	2.50	1.00
cn034	3.00	0.97
th013	1.90	0.97
cn004	3.00	0.92
kr174	1.84	0.90
sg075	2.50	0.89
in002	1.65	0.88
kh050	2.10	0.85
kh065	1.25	0.85
ml005	2.95	0.83
cn044	2.65	0.81
mn007	2.60	0.75
be005	2.70	0.73
fi010	2.55	0.69
cn035	3.60	0.68

(評点 sd 降順)

添付資料 2

第 2 次調査で水準判定の調整のために使用した作文例

<in055> (第 1 次調査において総合評点の平均が最高であったもの)

最近全世界で若者の間増えている喫煙は世界のどの国でも主な社会問題の一つとなっており、喫煙を減らすためにどのような政策をとるべきかは激しく論じられている。

レストラン・事務所・駅・映画館などの公的な場所でタバコを吸う人々も少なくない。タバコを嫌っている人々が周りにいるにもかかわらず、自分勝手にタバコを吸う人々の姿を見ると頭に来るばかりである。他人のことを少しも考えずに自由に生きるなんてなんと我がままなことだろう。

これに対*して異論のある者もけっこう大勢いるだろう。「タバコを吸うのは個人としての権利だ」などと主張するのである。ああいう「人権擁護派」に次のことを言いたい。人権を守り、尊重するのは理解できるが、もしタバコを吸う権*利のある者もいれば、自分の周りに清らかな空気を求める権*利のある者もいる。タバコを吸うつもりなら自分の家など私的な場所で吸って欲しい。

喫煙の主な原因の一つであるテレビコマーシャルのことも触れたいと思うが、喫煙を促すCMの放送の禁止を求めたい。現在の若者はテレビっ子が多く、テレビの影響が強いとは言うまでもない。善悪をわきまえることのできない青年はタバコのことを魅惑的に考えるに何も不思議*ではない。タバコを流行させる工夫としてテレビを利用するのは悲しくてたまらない。

<ml035> (第 1 次調査において総合評点の平均が最低であったもの)

現代の問題たくさんで存在している、そんな問題は中身から外見までよく起こっている。そんな事は悪い行動から見られる。どしてそんな事が起こるのか。考えれば考えるほど、たばこはどう思いますか。

知っているのはすべての人生は権利を持っている、でも横はないのだから。もちろんだれでも、‘はい、あります’と答えた。規則たとえばたばこについて公共の所と広告が禁止したのは重要な事があったちがいないだ。喫煙しない人のことはあなたたち考えないのでですか。医者陣の陣述からにお願いした人と 喫煙した人と比べたら喫煙した人よりニコチンの効果はたいへん悪い` といった。だからそんな事に対して責任のあるではないのだろうか。

考えてみると、若者の考え方もちっと悪い効果もあって分に子ども。マスコミを通して、子どもはもっとやさしいでネガチフな影響をもらった。通常、その原因でその子どもたちは同じグループで仲間を作って悪い事をした。例、故意の破壊。

そこから、このかみにたばこの悪い影響について書いたら十分じゃないかもしれせん。それで、規則を作っておかしいのじゃなか。

最終的に、最近起こった問題は含むのは健康だけでなくて行動も同じことです。だから私たちは公民中で生きるから必要な事のはほかの人に尊敬して下さい。

